

自由であるということ……旧約聖書を読む

エーリッヒ・フロム著 飯坂良明訳

河出書房新社 2010 年出版

報告者 松本倫明

～第一章 序説～

旧約聖書の目標

旧約聖書は単に、西洋の三大宗教の源泉をなしているから重要であるというだけではない。「旧約聖書はまさに革命的な書物である。(P11)」その書が目指すものは、人間の解放-個人、民族、人類全体に自由を得させること一である。

ヒューマニズムとは

旧約聖書を解釈するにあたって、フロムは徹底したヒューマニズムの立場を取る。そこでヒューマニズムの説明がなされる。

人類の一体性、自己の能力の開発→内面的調和と世界平和への人間の可能性
人間の目標=完全な独立…虚構や幻想を超えた十分な現実認識
暴力を疑問視←暴力は人間の理性と感情を歪め、幻想を信じさせる

ヒューマニズムが目指すのは、全世界的な個人の内面的な独立と世界平和である。

ユダヤ人は歴史上、自分の国を失った。然しこの事実すらヒューマニズムの観点からは幸福であった。なぜならそれは世界的なヒューマニズムの伝統を維持、発展させることを可能にしたからである。

～第二章 神について～

神概念の変化

心理的、精神的な経験に関する事象を指す言葉や観念は、それを用いる人が変わるに従い、変化する。また観念に関する経験は共有される考えがある。

旧約聖書の神観念の歴史には、以下の共通した考えがある。

自然や人工のものは究極的実在とか至上価値を成さない
人間にとって最高の価値、目標を表す唯一者が存在する
人間に与えられた愛と理性の能力を最高度に発展させて世界と合一することを目指す

一方、この神観念もそれ自身の生命と発展をもっている。

① 知恵の実

神は自然と人間を作った絶対的支配者として描かれていた。然しこの絶対的権力は、人間が神に対抗し得るという考えと並立している。人間は「知恵の実」「命の実」を食すことによって神の地位に立つことができる。そしてアダムとエバは知恵の実から食すのである。ここから人間は神の至上権に挑戦する。「人間の最初の行為は反逆であ(P30)」り、「人間の自由の始まりでもある(P31)」のである。これに対し、エデンからの追放という暴力行為を神は用いる。

② 神観念の矛盾

神は最高の支配者であるが、一方で、自己の内に神たる可能性を有した存在、人間を生み出した。人間が開花すればする程、人間は神に等しくなっていく。

③ ノアの方舟――神との契約

神は勝手極まる支配者として現れる。神は地上の生命を破壊しようと決意するが、後に自らの決意を後悔し、ノアと契約を結ぶ。

この契約は神観念の遙かな発展、成熟への進歩を意味する。なぜならこれは「完全な人間の自由、神からさえも自由であるといった思想に道を拓く一段階であった(P32)」からである。

契約の締結は、神から恣意的な自由を奪い、人間に神に対抗しうる自由を与える。またこの第一の契約は神とヘブライ族の間ではなく、神と人類一般の間のものであった。

④ アブラハム——神への要求

神との第二の契約はヘブライ人との間に結ばれるが、神の祝福は、全人類に及び、普遍主義が表明されている。この契約の結果は、アブラハムの神に対する正義の要求に現れる。神が悪い二人の為に五十人を滅ぼそうとしたとき、アブラハムは、神が約束を蔑ろにすることを責める。ここで彼は「要求する権利をもった自由な人間(P37)」となる。そして神は拒否する権利を持たない。

⑤ モーセに対する神の啓示

(自然の神より)歴史の神	名前をもたない神
--------------	----------

神はモーセに対して名を明かさない。然し偶像崇拜的観念(全てのものは時間と空間の中で完結するから名前をもつ)に慣れたヘブライ人にとって、名のない歴史の神は意味をなさなかった。神はこれに譲歩して、<名無し>という名を出して、妥協する。名がない理由は、最終的な形になったもののみが名をもつ以上、歴史の神として、神は「生きた過程、生成」だからである。

神はヤハウェという名で表されることがあるが、その名も無益に使われることはない。神を表彰することは禁じられる。人間は祈禱において、神へと語りかけることはできるが、神について語ることはできない。

⑥ マイモニデス神学

名前のない神という観念から、マイモニデス神学が生まれる。それは神の本質を表すのに、肯定的名辞を用いることはできないというものである。この否定の神学の結果として、神学は終焉を迎える。なぜなら神について何も語り考えることができない以上、「神の科学」はあり得ないからである。この神学からは以下の二つの問題が提起される。

聖書、ユダヤ教における神学の役割	人間が神に存在を主張することの意味
------------------	-------------------

神学の役割

神学の役割、正統(正しい信仰)について、聖書もユダヤ教も以降、神学を発展させなかった。神が存在するということのみが旧約聖書で見られる神学的教義であり、神について語られることはない。

神の存在を認める意義——偶像否定

ユダヤ教は神の存在のみを重要な思想としたが、この神学は抑、偶像の否定である。全く、偶像の否定は旧約聖書を貫く宗教的テーマである。

① 偶像とは何かを知る為に、神は何でないかを理解しなければならない。最高の価値、目標である神は、人間、国家、制度、自然等から作られる物ではない。一方、数々の偶像は諸々の人間の熱情が表された物である。人間は偶像に多くを捧げる程、貧困化する(疎外)。

② 偶像は<もの>であり、生きていない。一方、神は<生ける>神である。偶像は死せるものである。それを造り拝む者も又死せるものなのである。

偶像崇拜対神信仰

偶像が人間の能力の疎外された形である以上、偶像崇拜は必然的に自由や独立と矛盾する。一方、神や聖書は人間に自由を許容し、アブラハムやモーセとのやり取りの中で、人間の神に対する恐れと従属は減少する。神は更に人生の目標とその道を示し、決して無理強いしない。「偶像崇拜はその性質上、隷属を要求するが、その一方、神礼拝は独立を要求する(P62)」。

※ 本書において「偶像学」は主な論点とはならないが、それについて有益な指摘がある為、抜粋する。

「偶像学」は、疎外された人間は必ずや偶像崇拜者であるということを教える。というのは、その人は自己の生きた力を自分の外にある物の中に移入することによって自己を貧困化するとともに、自分を少しでも保持し、ぎりぎりのところで、自己の同一性を保とうとして偶像崇拜に陥らざるを得なくなるからである。(P64)

偶像崇拜とは人類は一致団結して戦わなければならない。万人の救済にユダヤ教の信仰は必要ではない。偶像崇拜をし、神を冒瀆しない限り、救われる。

名前のない神の意義

本質的属性を持たない神は、偶像崇拜ではないので、権威主義的であることを止める。人間は真に独立しなければならない。これは人間が神からも独立していることを要求している。

1 筆者が「について」を強調するのはこの言葉は「物」についてのみ使われるからである。

～第三章 人間観～

神の似姿

「人間の本性に関する聖書の最も基本的な命題は、人間が神のかたちに造られているということである。(P85)」神は自分に似せて人間の男女を造った。また後には人が神になるかもしれないことを神は恐れる。神が、人間が神になりうることを妨げる意味の一つには、人間が神になれないことの強調であると考えられる。

聖書における神との近似の観念は、人間が正義や愛を獲得し、実践するべきという預言に表れている。神を人間から区別する特質が「聖」という観念である以上、この「聖」に人間がなり得るという観念は大きな発展である。

律法の実践

人間が神の行為を真似る方法は律法を実践することである。預言者の教えの中心は愛と正義の表現、及びそれを実現させる行動規則からなる。神の行いを自ら行なうことで、益々神に近づき、同時に神を<知る>のである。

人間の進化

然し乍ら、神と人間の区別をなくすことができるという趣旨の見解が、最も偉大な律法学者の内の二人(アキバとラバ)から出される。これが意味する所は、人は死ぬ運命にあり、自己の内の神的要素と世俗的要素の葛藤があるといえども、律法や預言によって、内在本性を発展させることができる、ということである。

この人間の進化が持つ性質は、自然的な束縛からの独立である。自然に服従した人間が自由と独立を目指す。

(a) 知恵の実

知恵の実を口にすることが、人間の個性化の開始である。ここで人間は自然と対立し、真に人間的となる時、和解できる。

(b) ヘブライ人としての民族的歴史の始まり

アブラハムは神の指示に従い、家を離れ、エジプトに定住する。そこでヘブライ族は奴隷制という

社会的紐帯、自己を奴隷にする紐帯をも断たないといけない。

独立に対する解答

独立、自由は「内面的能同性」及び「創造性」の段階に人間が完全に達した時に成し得る。つまり、世界を把握し、関連づけ、合一する時にのみ、独立は達成される。然し真の独立は最も達成の困難なものである。

聖書、ユダヤ教が与える答えは以下の通り。

人間は無力	人間は発達の可能性に開けている	人間は紐帯への固執を打破できる
-------	-----------------	-----------------

選民思想と普遍主義

ユダヤ教は選民思想、ユダヤナショナリズムで表されることが多い。ユダヤ人の歴史の反動から、このナショナリズムの存在を説明することができるが、それを許容する説明はなされない。一方、この選民思想は普遍主義の原理と対立することでバランスをとっている。

人類の一体性の観念は、人間の創造の最初、乃ち一人の男と一人の女が造られる所から見られる。更にノアとの契約、アブラハムとのやり取り、異邦人に対する愛にも表れる。

～第四章 歴史観～

歴史過程とは人間の理性及び愛の力を発展させ完全な人間として本来の自分に帰るという過程を聖書は持つ。本性ではその歴史を「革命」「自己の歴史」「メシアのとき」に関してみていく。

最初の反抗——自由からの逃走

アダムの墮罪から人間の個性化が始まるが、これは一体性の喪失でもある。孤独になり、自然からも疎外され、反抗以前の世界に帰る望みを抱く。自意識を棄て、自由から逃走しようと願う。然し自己と自然の距離感を感じてこそ、再び自己、他者、自然とより高い次元で合一する契機となる。

この新たな調和は「メシアのとき」と呼ばれる。それは勝手に到来するものではなく、人間の努力によって将来する。人間が自己を滅ぼすか、新たな一体性を実現するかがユダヤ教のメシア主義である。

革命の要件

出エジプト

モーセは神から預言を授かり、様々な関係者との数々のやり取りの後にエジプトを脱し、奴隷制から解放される。この物語には一連の流れがある。

解放の可能性は、人々が苦しみを経験し、神がそれを理解して除こうとする時に生じる。苦悩は逆も人間的であり、人間を結びつける。人間は苦悩から何を成すべきかを知ることにはできないが、それが早く終わることを願う。この願いこそが解放を求める最初の衝動となるのである。

砂漠の旅

エジプトを脱した後、ヘブライ人は放浪の最中、飢えと乾きに悩み、自由を恐れる。なぜなら、エジプトでは秩序、決まりのある生活を送り、跪くべき監督者、王、偶像があったからである。

神は放浪者に毎朝、パンを降らす。この際、一日分以上拾ってはいけないという規則がある。食物は蓄えるのではなく、食べるものであるからである。同様に人生はしまっておくものではなく、生きるものであることも表される。但し、安息日の前日は例外になる。

十戒

モーセは十戒の記された石盤を与えられると俱に、民全員を祭司にする(つまり祭司階級の否定)、箱を造るように命じられる。これは目に見えないものを信じられない民に対する妥協である。

モーセの死

モーセの死は二つの側面から説明できる。

第一に、革命は時間が経って成功する。種々の「からの自由」は「への自由」へと繋がる。各世代の進歩は一步ずつ、自由を実現していく。

第二の側面は、預言者の引き継ぎである。モーセは自己中心的な部分が見られたが、それは自由のうちにある指導者として相応しくない。モーセに代ってヨシュアが業を受け継ぐ。

歴史を造る人間——歴史観の根本原理

モーセの死は、偶像崇拜や奴隷制からの解放の失敗でもあった。神は人間の心を変えて、解放を導くことはしなかった。それは、人間は自己の歴史を造るのであって神は介入しないという、歴史観の根本原理に基づいてのことである。

人間が自らの道を選ぶことは自由であるが、選択の結果については責任を負わねばならぬ(P156)
--

メシアのとき

メシアの時とは、「人間が完全なものとして誕生したとき(P165)」で、再び故郷に戻ることである。これは人間の「二元性」、例えば、自然の一部でありながら、自然を超越していることから齎される。

メシアの時の最も大切な観点は、平和、乃ち疎外されたものと人間との距離の克服である。

メシアの時にはもう一つの側面がある。それは恐怖、乃ち他人に恐れを抱かせようという望みや権力がなくなることである。これは普遍主義的な側面とも関係がある。人間は民族間の疎遠感を克服する。

聖書以降のメシア観

預言者にとって、人間の進歩の目標は「終わりの日」にあるとされたが、それ以降では、ダニエル書において、目標は「来世」、乃ち歴史の中ではなく、歴史を超越した理想の世界にあるとされる。

またメシアに対する見方も種々あり、偽のメシアもしばしば現れた。然しメシアの本質は人間であり、各々の人が自己の内にその要素を持っている、然しその素質を純化、成長させねばならないのである。

希望の逆説

偽のメシア等を経験した後、ユダヤ教は、目標が到達される確証なくとも、内面的な経験から確信するという希望の逆説を発展させる。信仰にはこの態度が不可欠なのである。

~第五章 罪および悔い改めについて~

聖書における善悪

聖書には決して、人間の本性が墮落しているとは記されておらず、ただ、自由意志によって善また把握を追求する性質があると言う。

聖書で使われる、悪や善への衝動を表す語(イエツェル)は、人間に固有に備わる「想像力」から善悪の衝動が生じる、乃ち善悪が成長するのは想像力という特質によるということを表している。

悔い改めの十日間

聖書の態度は、元日から贖いの日の間の「悔い改めの十日間」という観念に表れる。この間、人は自己の罪を自覚し、悔い改め、自己変革によって自己の運命の厳しさを克服することができる。

それでは罪、悔い改めというのはどのような観念なのか。

<ハタ>

旧約聖書で用いられる「罪を犯す」という語で最も重要なのは<ハタ>である。この語は「(目標を)逸する」や「迷う」という語根を持ち、従って、聖書において、間違った目的に適用された意志を表す。

<シュブ>

一方、悔い改めは<シュブ>といい、「立ち帰る」ということである。この悔い改めには自虐や悔恨は不要である。なぜなら、人間は自由、独立であるという観念の下、神からさえも自由であり、従って、罪、立ち帰りは人間自身のものであり、自己を責める服従関係は存在しえないからである。

~第六章 道=ハラカー~

ハラカーとは

聖書、ユダヤ教では神についての知識ではなく、神に倣うことに価値を見いだす。これはハラカーという「正しい生き方をしようと努力することによってなされる(P241)」。ハラカーとは、結論から言えば、神の行いに近づく道である。まずはハラカーの基本を成す原理を確認する。

安息日の意味

モーセの十戒の中では、安息日を守ることが他の宗教的、生活態度的な要求とは異質である。安息日が要求されるのは、まさに安息日こそがユダヤ教の中心観念たる自由、自然と人間の調和の観念を表現するからである。

労働とは自然に働きかけることである。一方、休息は人間と自然の間の平和の状態である。安息日を守り、自然との調和を守ることで、人間はより発展する。

~第七章 詩篇~

詩篇の形式的意味

詩篇は全体として、神殿の賛美歌といえる。また神殿の崩壊以降は、ユダヤ人の間で最もよく用いられる祈禱書となる。詩篇は人間の恐れ、望み、喜び、悲しみを表すという役割を負った。

然しそれ以上に筆者は詩篇の心理的態度を分析することで、宗教経験の様々な側面に注意を喚起する。

詩篇の内容の分類

詩篇の中身は様々な形で分類されてきたが、筆者はそれが記された際の主観的精神状態によって分類した。その結果は以下の通り。

単一モード	動態的(多面的モード)	賛美の詩篇	メシア的詩篇
-------	-------------	-------	--------

(a) 単一モードの詩篇

初めから終わり迄同じ気持ちのままで記された詩篇。

(b) 動態的詩篇

詩人の内面にモードが変化。絶望に対する希望の勝利を表す文書。それが表すのは、救いは一旦、途方もない絶望を経験した後にしかあり得ないということである。

~第八章 終章~

これ迄の流れ

権威主義的な神と服従的な人間

→反抗：自由と独立の芽生え

→立憲君主的な神：自分の約束に束縛される

→名無しの神、本質的属性を持たない神

→神からも自由な人間：預言者の言葉によってのみ導かれる。

信仰を超えて

信仰を持つ者も持たない者も、人間の解放と覚醒は共通の目標であるべきであり、到達の仕方は異なっただとしても、相互を理解し、それが愛であるということを認識すべきである。

然し、現代の産業社会に住む者は、その価値の追求を忘れていているようである。彼らは、不安、空虚感、孤独に取り付かれ、物品を消費することに明け暮れている。もっと人間らしくなるよりも、もっと使いたい、もっと所有したいと考える。

「人間は死んだ」のか。益々疎外され、人間としての存在を見失い、今直面する問題に対する答えにすら関心を失いつつある危険に、人間は陥っている。

今日の中心的課題は、その危険を認識し、人間に再び生命を与えることができる条件を作り出すことである。その条件は、社会的経済構造の変革、及び観念を超えた経験的価値の現実に対するヒューマニズムの中に求められるであろう。